

報 告

# 猫カフェ型 A A E における来場者の自由記述の分析

—グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて—

尾 形 良 子 (北翔大学・北翔大学北方圏学術情報センター)

今 野 洋 子 (北翔大学・北翔大学北方圏学術情報センター)

## 要 約

大学祭企画において実施した「猫カフェ」の効果についてのアンケート調査の分析を第1報で行った。本研究は第2報として来場者の自由記述を対象に、来場者にとって猫カフェがいかなる経験であったのかについて質的分析を行うことを目的とした。

本研究においてグレーザー派のグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いることにより、以下の諸点を明らかにすることができた。

1. 猫カフェは「一期一会」の経験であった。
2. 猫カフェにおいて人(来場者)は動物(猫)との相互作用によって満足感を得、動物とのふれあいの楽しさや効果を改めて認識していた。
3. 短時間の中でも、人と動物は一時的ではあるが一定の限定的な関係形成を成し遂げていたと言える。

キーワード：猫カフェ 人(来場者) 動物(猫) グラウンデッド・セオリー

## I. はじめに

本研究は動物と人間との関わりについての関心から出発するものである。動物と人との関わりにおいてかけがえのない生命を持ち、人と「きずな」という関係性を持つ動物たちの存在への再評価がなされ<sup>1)</sup>、人と動物に関する国際会議も回を重ねている現状がある。

本研究は大学生が関わる動物介在教育実践として、本学の大学祭企画において実施した「猫カフェ」の来場者に協力を呼びかけたアンケート調査を対象としている。第1報はアンケート調査の分析を中心とした研究を行っている。

第2報である本研究は「データが語る」ことを内容として分析していくグレーザー派のグラウンデッド・セオリーを研究方法とする。そのため大学祭企画の実施目的である動物介在教育というキーワードから自由に、あくまで自由記述のデータに沿った来場者にとって猫カフェがいかなる経験であったのかについて質的分析を行うことを目的としている。

## II 研究の方法

### 1. 研究方法

本研究ではアメリカの社会学者であるグレーザー(Glaser, B)とスト劳斯(Strauss, A)が1960年代に構築したグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。また現在では認識論やデータ分析方法の違いから、グレーザー派、スト劳斯派、スト劳斯・コービン派など複数のグラウンデッド・セオリーの種類があるとされているが、本研究においてはグレーザー派のグラウンデッド・セオリー・アプローチによった。

グラウンデッド・セオリーは、データから直接かつ組織的に理論(仮説)を生成するためにデザインされた帰納的な研究方法である。仮説・理論の確からしさを検証する研究に対して、グラウンデッド・セオリーの目的は仮説・理論を生成することである。分析で使用するコードや変数は研究に先立って文献・推論から持ち込まれるのではなく、研究から見出されるものとする。検証的アプローチではデータの形式・タイプやデータ収集の範囲は計画段階で選択され、使用するであろう理論や仮説に合わせて検証するために整えられるが、発見型アプローチであるグラウンデッド・セオリーでは研究の過程でデー

タから引き出されるものと見る。つまりグラウンデッド・セオリーでは、研究者はデータに何が起きているのかを発見するためにオープンな姿勢でいることを期待される。そのため通常の研究において当初に実施される先行研究レビューは行わない。研究対象の領域における一般的な理論、調査、研究やあらかじめ想定するアイデアなどを無の状態にして研究を始める。研究者は「○○について話して下さい」など、一般的で漠然とした問いかけから調査を始める。研究に必要なデータは構造化されない、開かれた質問によって集められていく。通常、聴き取り調査の中で、調査対象者がトピックについて自ら話したいことを話せるようにするような質問を続けていく。こうした質問は研究者の枠組みではなく、調査対象者の答えに関連するものは何かを探ることである。結果としてデータと浮上してくる理論（仮説）が無理やり結び付けられるのではなく、結びつくべくして結びつくことを目指すものである。

次にグラウンデッド・セオリーの分析過程について述べる。

#### 1) データ収集

この段階では先行研究や文献の検討をせず、事前に決定された研究問題、リサーチ・クエスチョンを用意しない。調査対象に関する一般的知識や常識からデータ収集をスタートする。一般的知識とは調査の最初の足がかりとなるものであり、調査対象の問題、現存する課題や関連する調査者の知識などを保留にし、いわば「白紙」の状態からデータの収集に当たる。多くの場合、対象者との面接による集中的な聴き取りを行う。その後は当初の研究トピックの枠にはまらず、順次必要と判断された対象者へのインタビューを継続して実施していく。グラウンデッド・セオリーではデータ収集のプロセスを理論的サンプリングと呼び、データ収集とデータ分析は行き来しながら続けて行う。

#### 2) データ分析の過程

グラウンデッド・セオリーでは継続的比較分析法による分析を実施する。連続的なデータ収集とデータ分析によりコンセプトを関連付け、コンセプトとコンセプトを関連付けていく。

##### ①オープン・コーディング

データ分析はデータ密着型コーディングによって行う。経験的な実態を情報と与えてくれるサインとでも言うべき「コード」によってまとめるものであり、当該研究領域において関連性があるフィッティングしていなければならない。

オープン・コーディングはその名の通り、すべてのデータをコーディングする。コーディングに際してはま

ずデータにおいて出来事であるインシデント同士を比較し、次にインシデントとコンセプト（概念）の比較、さらに概念同士を比較するという過程を踏む。

分析者はコーディングの際に逐語録などのデータに対して、基本的に三つの質問をしながらコード化していく。第一に「このデータは何を研究させるものか」である。この質問を投げかけながら分析し、研究対象領域の多くの場面や変化に適用することができる概念である核概念を導くことが期待される。最終的には研究と理論（仮説）生成の焦点となっていくものである。第二の質問は「この出来事は何の領域を示唆しているのか」というものである。経験的な実態をコード化していく質問である。第三は「データでは実際に何が起きているのか」という質問である。これはデータに現れてくる、分かりにくい現象に対して理解しようとする姿勢を持つための質問である。

##### ②選択的コーディング

選択的コーディングはオープン・コーディングを実施して各概念と領域（カテゴリー）を発見することによって開始する。オープン・コーディングがデータのすべてをコーディングしようとするのに対し、選択的コーディングでは核概念に関係するものだけに限定してコーディングする。選択的コーディングによって、データとコンセプト、コンセプトとコンセプトの関連性が明らかになり、強化されていくことになる。

##### ③理論的コーディング

理論的コードとは理論的に整理することを内容とする。条件、仮定、側面などの抽象的なコードであり、実質的なコードがどのように関連しているか、概念化して理論化していくプロセスのことである。

#### 3) 理論的メモ書き

グラウンデッド・セオリーにおけるメモ書きとは、コードとコード、コードとコンセプトとの関係について理論的に書くことである。逐語録などのデータそのものは一度収集すれば再度分析することも可能であるが、分析の過程で浮上してくるアイデアは早急に書き留めておく必要がある。

浮上した核概念を中心とした仮説・理論によって進めることが確定した後、グラウンデッド・セオリーにおける先行研究を行う。既存の関連する文献を分析し、統合していく過程である。

#### 4) 理論的アウトラインの作成と執筆

浮上してきた理論（仮説）のアウトラインを作っていくための作業である。理論的コードを用いてコンセプトの関係を作り、第三者に伝えるための順序立てた説明を

行う。理論的分類と理論的アウトラインを完成させ、論文の執筆に至る段階である<sup>2-4)</sup>。

## 2. 研究対象

2008年8月2日（土）、本学の福祉心理学科臨床心理コースおよび福祉心理学科コース並びに臨床心理センター合同企画「猫カフェ」来場者を対象に、質問紙調査を実施した。来場者が「猫カフェ」でソフトドリンクや菓子の飲食をし、猫に触れたり、遊んだりした後、質問紙の回答を依頼した。配布・回収数は114部で、自由記述欄に記入した69部を本研究での対象とした。自由記述欄への記述を行った来場者の年代は以下の通りである。

表1 年代別来場者数（自由記述分析対象者）

年 代	人 数
10代	32
20代	34
30代	0
40代	2
50代	1
計	69

倫理的手続きについては、調査の目的について説明し、学術研究以外で使用しないことを約束し、調査協力の同意を得た。

「猫カフェ」で用いた猫は4匹で、第1報にその特色を表示した。本報告ではその情報に加え猫カフェ当日の猫たちの動き方についても記入し、以下に示した。余り動き回らない猫と活発に動き回って来場者とふれあった猫がいるなど、来場者との関わり方の頻度や質においても猫によって異なっていた。

表2 「猫カフェ」の猫と当日の動き一覧

	ピアノ	ちこ	美々葉（びびは）	虎々冬（ここっと）
雌 雄	♀	♀	♀	♂
種 類	シャム	Mix	Mix	Mix
毛 の 色	シールポイント	白黒斑	黒	シルバータビー
目 の 色	青	黄色	黄色	黄色
年 齢	19歳	13歳	2歳	1歳
体 重	2.8kg	2.6kg	2.2kg	4.7kg
予 防 接 種	済（3種混合ワクチン：猫ウイルス性鼻器官炎・猫カリシウイルス感染症・猫汎白血球減少症）			
性 格	おとなしく、優しい	おとなしいが、しっかりしている	活発で外向的である	陽気でおだやか、社交的。
当日の動き	ゆっくりと室内を歩き、なでられていた。	椅子の下にいたり、歩き回ったりしていた。	前年の猫カフェの際には活発であったが、今年はほとんど動きがみられなかった。	室内をよく動き回り、参加者とのふれあいが最も多かった。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 核概念の浮上および概念の分析結果

分析の結果、一期一会という核概念が浮上した。つまり猫カフェは来場者にとって一期一会の体験であったと言える。

猫カフェは1日のみの大学祭の企画であり、入場して飲み物を頼み、猫を眺めて楽しんだり、ふれたりする機会を得るという内容であった。今回の猫カフェは動物とゆっくりふれあうことを可能にする、非日常の機会であ

あったことが読み取れる。来場者（人）は猫を眺めたり、さわったりした結果、満足感を得、動物とのふれあいの楽しさや効果を認識している。また、満足を与えてくれた猫（動物）の持つ「捨て猫だった」「身体が不自由な猫である」といった物語に関心を持ち、楽しませてくれた猫たちがさわられたり、子どもに追いかけられたりする負担に対して心配していた。1日、それも短時間での出会いではあるものの、猫カフェに参加した時間の中で人と動物は相互作用を行い、猫とともにあったのである。そこから一期一会という核概念が浮上してきた。

次に核概念を構成する個々の概念について説明しながら論じていくこととする。

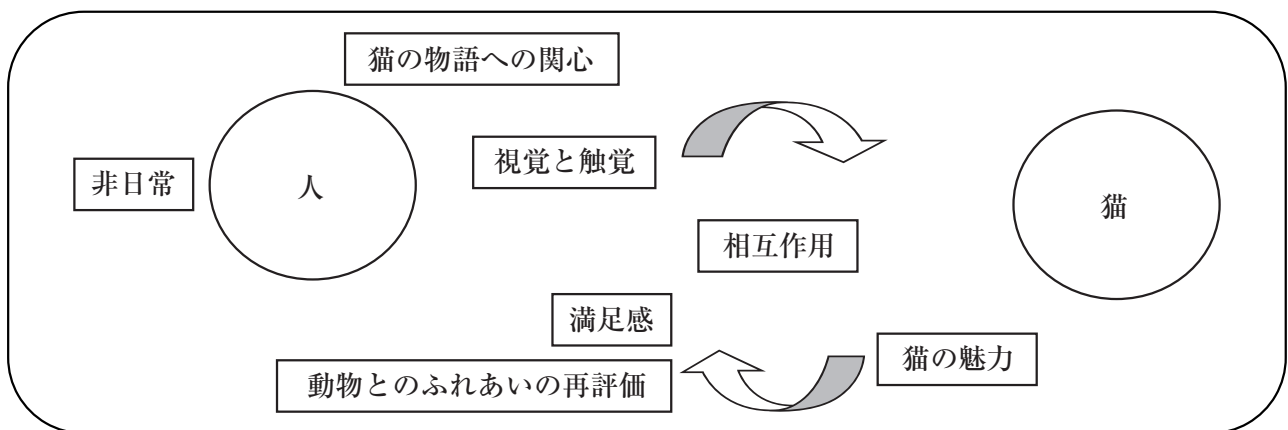


図1 猫カフェ概念図：一期一会（核概念）

#### 1) 相互作用

##### ①視覚と触覚

来場者（人）は元気に走り回る猫を見る、猫のしぐさを見て楽しむという視覚と、猫をさわる、つまり触覚を使うことによって「犬より硬い毛」というような感想を抱いていた。猫の様子を見て「猫、かわいい」という記述も多く見受けられた。人は猫カフェで五感のうち、視覚と触覚を使った体験をしていたと言える。

##### ②満足感

来場者は猫カフェのゆったりとした空間の中で、緊張がほぐれ「和み」「癒される」という体験をしている。リラックスして「楽しかった」「うれしかった」というポジティブな反応を示し、癒しとくつろぎを味わい満足している様子が見えられた。満足度が高かった複数の来場者は、「来年も実施してほしい」「最高の企画」と記述している。

##### ③動物とのふれあいの再評価

「また（猫を）飼いたい」「毎日家で関わったらもっと楽しいだろう」などと、猫カフェに来場して改めて動物とのふれあいによってもたらされる効果について認識していることが分かる。

##### ④猫の魅力

猫は「かわいい」「元気な猫は楽しませてくれる」「猫の自由な感じが好き」など、猫カフェへの来場者が眺める、なでるなどの行為によって猫の魅力に作用を受けている様子が分かった。

##### ⑤猫の物語への関心

来場者は「可愛いココちゃん（虎々冬（ここっと）」「19歳の猫は元気」、否、元気がないなどと、その日に初めて出会った猫をその名前とともに見分けていた。また「捨てられていたとか半身マヒとか聞いてかわいそうだと」思った、「問題を抱えた子達だからがんばってほしい」など、猫の境遇など猫の個別の「物語」にも関心を持っていた。

##### ⑥猫の負担への配慮

猫カフェにいた猫たちが「子どもに追いかけるねこたちがかわいそうだった」「触られすぎてストレスがたまっただけではないか」などと、来場者は自分たちを楽しませてくれ、満足感を与えてくれた猫に対しての懸念を表現していた。

## 2) 非日常

来場者は、「今、動物は飼えない」「あまり動物と遊ばない」「猫はもう飼う予定がない」「久しぶりのふれあい」などのように日常的に関わることでできない来場者の生活環境を表現していた。それは「生の猫を見た」「人形じゃない」「ホンモノの猫」という記述からもリアルな猫の存在感を驚きを持って感じている様子がうかがえた。

猫カフェは一日だけの非日常の経験ではあったが、人は視覚と触覚を使って猫に関わった結果満足感を得、動物とのふれあいの楽しさや効果を改めて認識していた。猫は人をその魅力で魅了していた。人は相互作用の中で満足を与えてくれた動物の物語に関心を持ち、猫たちの側の負担に対して配慮を示していた。短い時間の中でも、人と動物は一時的かつ限定的なものではあるものの一定の関係形成を成し遂げていたと言える。

## IV. おわりに

最後に本研究の限界と今後の研究課題について述べる。

本研究では核概念を浮上させ、個々の概念による分析までは行っている。しかしコア・カテゴリーの生成には至っていない。また、第1報で実施したアンケートを中心とした研究との比較、分析によるトータルな研究はできていない。例えば第1報では飼育経験がある来場者は猫にふれるだけでなく猫と遊んでおり、飼育経験がない来場者は猫を眺めた、ふれるのみにとどまったという傾向が指摘されている。しかし自由記述を対象とした第2報では、どちらかといえば猫とふれあう経験すらも日常的ではないという意味内容の表現が複数見られ、猫カフェは非日常の体験であると分析された。飼育経験と猫カフェにおける行為の関連をはじめとして、調査全体の分析を行うことは必要だといえる。来場者は猫カフェ企画が次年度も開催されることを期待している。再度の実施がかなう場合には、アンケート調査の分析と自由記述内容に関わる質的分析の双方を含んだ総合的な研究を行うことが残された課題だと言える。

付記 本研究は、平成20年度北方圏学術情報センター PORTO の助成を受けて行われたものである。

## 《引用・参考文献》

- 1 林良博『ヒトと動物 野生動物・家畜・ペットを考える』2002朔北社 p276.
- 2 志村健一『グラウンデッド・セオリーにおける記録』「ソーシャルワーク研究」31(3)2005相川書房.
- 3 B・G・グレイザー, A・L・ストラウス 後藤隆他訳『データ対話型理論の発見』1996新曜社 p64-106.
- 4 志村健一訳『アクションとしてのグラウンデッド・セオリー』「聖隷クリストファー大学社会学部紀要」6. 2008.



写真1 「猫カフェ」の様子 1



写真2 「猫カフェ」の猫の様子 1



写真3 「猫カフェ」の猫の様子 2



写真4 「猫カフェ」の猫の様子 3



写真5 「猫カフェ」の猫の様子 4



写真6 猫カフェを担った学生たち